

## ゼロ術語から出発する句構造文法

— 補語名詞句否定説：名詞句すべて指定辞説 —

田 原 薫

要旨：

本論考の目的は、閉塞状況に陥ったチョムスキー派のミニマリスト・プログラムによる統語論に代わって、それを根底から見直し、その論拠の適格性を批判的に検討することによって、新しい句構造文法へ向けての理論構築の基盤を提供することにある。すでに拙論（1996）「SOOThと「挟み統率」から開ける展望 —ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に—」（『ニダバ』第25号）などにおいて、いわゆる「VP内主語仮説」とは反対に、目的語候補を指定辞に・主語候補を補語に位置づけたVPのシステムが種々の文法問題を解決する理論装置として有能であることを述べてきた。両システムを比較すれば：

図A （VP内主語図式）

図B （SOOTh図式）

VP ——— V' ——— 目的語候補  
 \                \  
                   主語候補 V

VP ——— V' ——— 主語候補  
 \                \  
                   目的語 V

のようになる。しかし、今回は図Bの思想をさらに発展させて、いわば‘Revised SOOTh’として、図3に示すように主語候補を動詞の直接項とせず、Vの補語であるゼロ述語句の指定辞と見なす新しい句構造を提案し、ミニ・プロ批判の立脚点とする。

さて、ミニマリスト・プログラムを批判するという場合、その対象は主として Chomsky (1995)に第3章・第4章として収められた二つの論文 ‘A Minimalist Program for Linguistic Theory’ と ‘Categories and Transformations’ ということになるが、そこで採用する批判のための方針は二つある。まず一つは、最初から別の原理を確立しておき、その立場から対象理論を分析して欠陥を明らかにするやり方（外部批判／外的批判）であり、もう一つは、評論者自身が一応相手の論理の中に入っていった、理論構築を追体験していくうちに、その論理の矛盾を暴露していく方法（内部批判／内的批判）である。本論考では両方の方針を採用するが、とりわけ外的批判の原理として主張するのは、表題の副題にも掲げたように《補語名詞句なんて存在しない。名詞句はすべて何らかの指定辞だ》というものである。これは当然、田原(1996)の枠組であるSOOThにも影響を及ぼすが、実はそれはSOOTh構築の際に既に織り込み済みであるから、大綱は不変である。

# 1. S O O T h のもつ根源的正当性の論拠

## 1. 1 音声形式と S O O T h との節文構築上の並行性 (肖像性)

「目的語指定辞起源説」(Specifier-Original Object Theory)というのは、典型的には他動詞が作る V P において、最初に V と結合するものが主語候補 N P であり、そうしてできた V' と結合して V P を作るための下位範疇化成分こそ目的語 N P や「補文」(資格は C P, A G R s P, T P など色々)である、と見なす説であり、チョムスキー派の「V P 内主語仮説」(V P -internal Subject Hypothesis)とは対極に立っている。前者は田原(1995a, b と 1996a, b)に詳しいが、後者は変形文法の文献にあまりにも広汎に普及していて、おなじみであろうから、今さら説明は不要であろう。本稿は前者の側の正当性を主張する。

すなわち、第 1 で、しかも最も根源的な正当性は、S O O T h の節文構築が、英語の P F における音声的实现の実態と肖像的(iconic)だ、ということである。それは次のようなことである：英語の文は基本的には S V O … の語順に沿って発話されるが、当然、最初に原初的沈黙があるわけである。その沈黙と最初に結合する〔つまり最初に発話される〕のが S [文主語：SPEC (A G R) s に相当する]であり、その音声集合と次に結合するのが定形動詞であるわけである。定形動詞には助動詞も入るが、今はそれを保留して、V を非過去または過去の時制と人称の一致をもった普通動詞とする典型的なケースを考えると、これに対応するのが、節文構築過程で 2 番目に集合に加わる V である。そして 3 番目に集合に加わるのが概して言えば目的語 O になる。これと肖像的に対応するのが V の指定辞 [SPEC<sub>v</sub> すなわち NP1 ] になること、言うまでもない。この肖像性を図の対比によって示す。ただし、従来の論文で V P の句構造図の上位・下位に現れる理由から NP1, NP2 と符号化してきた名詞句を、今回は句構築過程での出現順にそれぞれ NP<sub>0</sub>( $\emptyset$ ), NP1 と符号化することにする。従って V の「補語」が新しい NP<sub>0</sub> であり、「指定辞」が(従来どおりながら)新しい NP1 である。なお、Chomsky(1995) 第 4 章などに現れるいわゆる「D P 分析」における D P もここでは N P と区別せず、N P と表記する。

図 1 音声部門の構築：

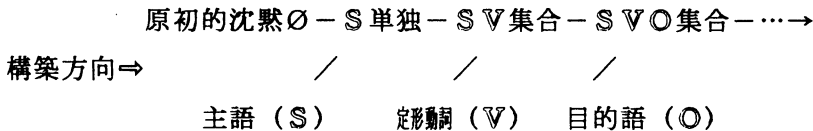
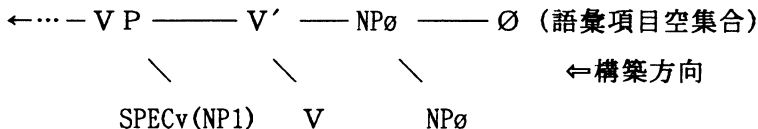


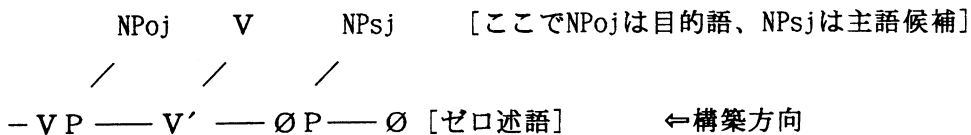
図 2 統語部門の構築：〔ここでは枝の向きは捨象する〕



これらの二つの図を対比すれば、互いに鏡像的になっていることがおわかりであろう。しかしそれは書き方の問題であって、統語部門の構築過程を左から右へ向かって書くこともできるから、もしそう書けば、NP<sub>θ</sub> と S が、また SPEC<sub>v</sub>(NP1) と ○ がそれぞれ肖像的しかも正像的に重なるわけである。従って NP<sub>θ</sub> が S の、NP1 が ○ の候補にふさわしい。

ところで、「補語名詞句否定説」などと言っておきながら、図2ではNP<sub>θ</sub>のうち上位のものが結局 V の補語になっている、と指摘される向きもあろうが、実は、或る思想によれば上位のNP<sub>θ</sub> は Ø の投射とも見られる。これには後ほど言及するが、さしあたり次のように理解しておいて頂く：変形文法でも私のこれまでの S O O T h でも、句構造の最右端には V の補語として NP があるが、実はそれは真の末端ではなく、「ゼロ述語」の指定辞だ、という思想である。「ゼロ述語」というのは「何かを述べる作用」をするものの、当面その内容が未定の述語であり、その指定辞がいわば叙述されるのを待機・期待しているようなもの（被説明項になるようなもの）という性格のものである。従ってその指定辞は当然、主語候補ということになる。そこで他動詞句の句構造を書くと、

図3



のような構造になる。こうすればNP<sub>sj</sub>はいかなる格付与／格照合からも免れ、従ってこの形では音形を付与されないことになるわけであるが、もしこれが情報的に必要だということになれば、情報の再組織化によってPPなり何なりに転換せよ、ということになる。しかしこのNPはS O O T hの機構によってSPEC<sub>T</sub>やSPEC<sub>s</sub>に昇進することもできる。これが、主語候補が主語になったり、いわゆるargument demotionによって左遷されたりする機構の説明に役立つのである。

図3で、節文の構築がこれから始まるという段階で、「ゼロ述語」はまだ、他動詞なのか、自動詞なのか、それとも形容詞なのか、或いは述語名詞（句）になるのか、まったく未定であるが、とにかくその相棒〔補語と指定辞の区別はまだない！〕のNP<sub>sj</sub>と緊張関係を作り出して、叙述という言語行為が展開される舞台を設定する。こう考えると、NP<sub>sj</sub>のθ役割は未定であり、当然ながら他動詞の目的語候補とか受動者項といった文法役割もまだもっていない。VP内主語仮説のように最初に出現するNPをそのように決めつけるのは単なる神話もしくは妄想にすぎない。

さて、このゼロ述語Øは、上に掛かる述語の位置（図3ではVの位置）に移動編入されて複合主辞(complex head)を作る、と考える。この複合主辞が自動詞・形容詞・述語名詞になれば、最初に出たNP<sub>sj</sub>以外の項名詞句を必要としない。複合主辞が他動詞になる場合のみに第2の項名詞句が指定辞として必要になり、それがNP<sub>θj</sub>になるのである。ではこの

NP<sub>o</sub>jならば決まった $\theta$ 役割を持てるか、と問えば、NP<sub>s</sub>jの場合と同様、やはり持てないと答えざるを得ない。図3は文構築の終点ではなく、当然これの上に別の述語が掛かっていくわけであるが、図3の直上位にかかる述語には言語の種類（類型）によって、その標示する $\theta$ 役割に関して二つの選択肢があると思われる。それを以下で説明するが、目的語になることを約束されたかのような‘NP<sub>o</sub>j’という表記は誤解を招くので、以下では無機的に‘NP1’と表記し、‘NP<sub>s</sub>j’も‘NP $\emptyset$ ’と書き替えることにする。

図4

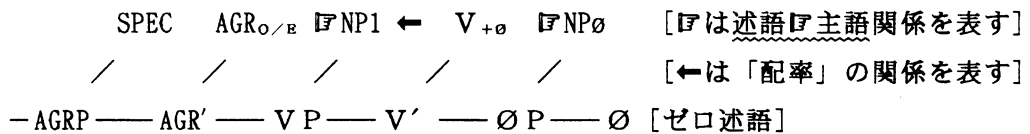


図4で NP $\emptyset$ がVに対して「主語」であったように、NP1は述語AGR<sub>o/e</sub>に対して「主語」である、と言える。AGR<sub>o/e</sub>はどんな機能をもつか・その「主語」のどんな特質を叙述するかといえ、NP1のもつ相対的な $\theta$ 役割を明示或いはチェックするのである。二つの選択肢のうちAGR<sub>o</sub>の方は「対格言語」に現れ、NP1が相対的に受動者性(patientivity)の高い方の項であることを明示する。他方のAGR<sub>e</sub>は「能格言語」に出現し、NP1が相対的に能動者性(agentivity)の高い方の項であることを明示する。いずれにせよ、このNP1は現場において $\theta$ 役割をチェックするAGRと・項の身分を保証するVとに「挟み統率」されているので、対格言語では対格に・能格言語では能格に格標示を認可され、ミニマリスト・プログラムにおけるトリックのように格照合のために他所へ移動する必要がない。

以上のようにNP1が積極的に $\theta$ 標示されるので、NP $\emptyset$ の方は対極に残った $\theta$ 役割を消極的に引き受けることになる。すなわち対格言語では能動者項、能格言語では受動者項である〔それぞれ主格、絶対格で格標示される運命にある〕。要するに $\theta$ 役割系はVP内では決まらず、AGRPの構築段階で初めて決まるのである。VPの段階でその内部構造に即して決まると思ひ込むのはチョムスキー（派）の妄想であるが、もしそうなら、この世に能格言語が存在することの説明が困難になるであろう。

## 1. 2 シンタグラマ形成に関する内容類型学の立場

チョムスキーの（少なくとも1993年の）考えでは、対格言語であろうと能格言語であろうと、VP内主語仮説の図式は共通で、従ってそれに基づく $\theta$ 役割の配当も共通で、ただ異なるのは格照合子Agr<sub>s</sub>とAgr<sub>o</sub>。〔本稿のAGRsやAGR<sub>o</sub>との違いに注意！本稿では単なる機能範疇ではなく、無音の形容詞である〕という機能範疇のどちらが「活性(active)」になるか、であるとしている。すなわちAgr<sub>s</sub>が活性化すれば対格言語の統語法が生じ、Agr<sub>o</sub>が活性化すれば能格言語の統語法になるという〔Chomsky(1995) p.176 参照〕。自分のよく知らない分野を軽蔑するのが、今回も露呈されたチョムスキーの最も嫌らしい人格的欠点で

あるが、能格言語の問題は、いわゆる「能格性の分裂」とか‘antipassive’の問題などがあって、言語類型学に素人のチョムスキーが安直に理解するようにはいかないのである。よく知らないことに対して謙虚であることも知識人の重要な資質であろう。

これに対して、言語類型学ではVPに相当するシンタグマ(syntagma)の形成をどう見ているかと言え、すべての学者の意見が一致しているわけでは勿論ないが、少なくとも、対格言語と能格言語とでは別のシンタグマ構築原理に従っているのだ、という見解は存在する。生成文法家がまず読まない本であるが、山口巖(1995)『類型学序説』を見てみよう。

§ 49 これに対し、すでに述べたように対格言語のばあい、主語と述語動詞が第一次のシンタグマをつくり、他動詞の場合にはこれがさらに対格に立つ目的語と結びついて第二次のシンタグマをつくる、と考えれば、もし対格を主格に転換しても、新しい主語と述語とが結合するだけで、文の要素とシンタグマの関係には変化がない。…(中略) …

これに対して能格言語あるいは後に述べる活格言語のばあいには、意味上の目的語と意味上の述語他動詞とが第一次のシンタグマをつくり、意味上の主語はこのシンタグマと結んで第二次のシンタグマをつくると考えられる。…(下線は田原による)

引用した条はp.74にあり、これは第1部 6. 内容的類型学研究の進展 I. 能格言語の中に含まれている。この見解を適用すると、英語や日本語のような対格言語にとっては、NP $\emptyset$ (主語候補)とV(他動詞)とを組んでV'を作り、さらにそれとNP1(目的語)とを結束してVPを作るSOOThの方が正当で、チョムスキー(派)流のVP内主語仮説は、実は対格言語を能格言語の統語構築システムで分析している邪道なのだ、ということになる。前節の図4の末端部はSOOThのそれとは違うけれども、田原(1996a)の「引率」の概念を適用し、Vに引率されているNP $\emptyset$ とV自身とで第一次のシンタグマを作ると考えれば、このNP $\emptyset$ が能動者項か/受動者項かに従って、対格言語か/能格言語かの統語法が形成されると考えてよいであろう。因みに原型的な能格型統語法の例を示すと：

- (1) vacas istakan bekana「兄弟が(能格)・コップを(絶対格)・壊した」  
(2) istakan bekana「コップが(絶対格)・壊れた」 [ibid. p.71]

…に代表されるアヴァール語の例のようなものである。ここで定形動詞 bekana には他動詞と自動詞との概念上の区別がなく、istakan [ロシア語のс т а к а нと借用関係にあるものであろう]は「主語」と「目的語」との役割上の区別をもたず、要するに patient という $\theta$ 役割の共通性をもって、最も無標的な絶対格の形で現れている。

ただ、注意すべきは、たとえ自動詞が上例のようにunaccusative(非能動的)なものではなくunergative(能動的)なもの、たとえば「踊る」「泳ぐ」のようなものであっても、[その場合は当然、 $\theta$ 役割(:agent)を規準にした上例のような同型性は成立しないが]その唯一項が図4のNP $\emptyset$ の位置に発祥したと考えれば、それが能格項にならず絶対格標示を

やがて受けるようになることが説明できる。それには《1項動詞の場合は $AGR_{\theta/E}$ が不活性化する》と決めておけばよい。そうすれば $NP_{\theta}$ が $NP_1$ の位置に転入しても、どうせ「挟み統率」による格標示を獲得できないから、それを求めて $SPEC_T$ に上昇するしかないわけである。要するに $AGR_{\theta/E}$ がチェックするのは「絶対的な $\theta$ 役割でなく、相対的なagentivity或いはpatientivityの高低」だと考えると、1項述語では問題は起きないことになる。

以上のように内容類型学の成果と、図4で示したゼロ述語から出発する句構造文法の思想を結合することにより、対格言語・能格言語の双方における他動詞（2項述語）と自動詞（1項述語）との第一次項と第二次項の処遇はエレガントに説明できた。

## 2. 格理論の背理に苦しむチョムスキー（派）の詭弁

### 2. 1 ミニ・プロが難産する他動詞構文の主語

前章では新しい句構造原理によるミニ（マリスト）-プロ（グラム）への外部批判を簡潔に展開したが、今度は内部批判に移ろうと思う。以下で主に対象とするのは、オリジナルが1993年に発表された Chomsky(1995)のCh.3 ‘A Minimalist Program for Linguistic Theory’ であるが、Ch.4 ‘Categories and Transformations’ にも引き継がれて生き続けている‘chain’の理論に重点をおいて論じる。まずミニ・プロ流の句構造から概観する。

図 5

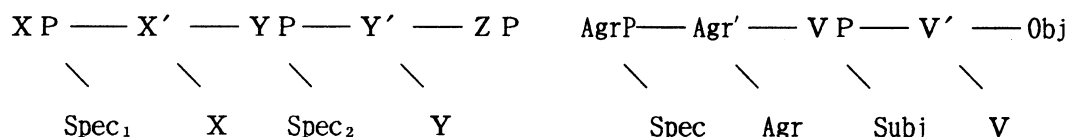


図 6

Chomsky(1986)などで盛んに論じられていた「統率」の概念は新しいシステムではなぜか敬遠されているが、“But head government plays a critical role in all modules of grammar; hence, all of these must be reformulated, if this program is to be pursued.”（<Chomsky(1995) p.173）と言われているとおり、ここで定式化しなおされて提起された概念は‘domain’, ‘minimal domain’, ‘complement domain’, ‘internal domain’, ‘checking domain’などである。スペースの関係でここでは詳しく解説する余裕がないが、まず領域‘domain’というのは従来の統率‘government’の範囲に相当し、たとえば図5でXの領域は $Spec_1$ , YP,  $Spec_2$ , Y, ZP [Y'のような中間投射は積極的な意義を認められない] およびそれらが支配‘dominate’する成分である。最小領域‘minimal domain’というのは、Xについて言うと、 $Spec_1$ とYPだけを指し、それらが支配する成分のことを度外視したものである。従ってYについては、 $Spec_2$ とZPが最小領域となる。補語領域‘complement domain’というのは、補語が自分自身を含めて(reflexively) 支配する成分の集合であり、Xについて言えばYPとその子孫すべてを指す。子孫のことを度外視してYPのみを指す場合は、それを‘internal domain’と呼ぶ。また同じく $Spec_1$ のみを指す

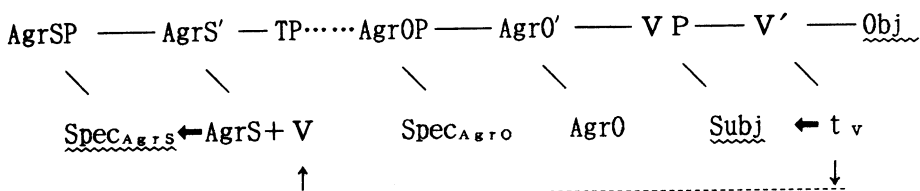
場合はそれを‘checking domain’という。それぞれ「内部領域」「照合領域」と訳すのであろうか。ところで、上に挙げた句構造には付加によって生じる2分節構造が含まれていないが、当面の問題に関係がないので省略した。

ここで‘internal domain」「内部領域」というと、いかにも複雑な構造をもっているように響くが、実はいわば「補語ポッキリ」ということであり、この概念の有用な適用事例はGB理論やミニ・プロで想定するVPの補語NPぐらいしかない。もし前章のように、VPの補語はNPでなくOPであり・NPはその指定辞だ、とするシステムのもとでは、殆ど実質的な意義を失ってしまう。そこではむしろ補語の指定辞こそ重要なのである。

さて、図5の具体的な例が図6であるとしてみよう。図6でSubjはいわゆる「VP内主語」、Objは目的語候補である。このObjは格照合を求めて図のSpecの位置に上昇しなければならない。そうするとSubjまたはその痕跡を跨ぐことになる。従ってそれは相対化最小性の違反であり、過当上昇であり、「最短移動」の条件の違反であるという。この問題点を解決というより単に回避するためにチョムスキーは「移動履歴鎖」‘chain’の概念とその最小領域および‘equidistance’の概念を駆使する。それは次のようなことである。

「VP内主語」Subjが「途中下車」を一切せず、一気にSpec<sub>AgrS</sub>の地位まで上昇するのは、その主辞たるVが一気にAgrSまで上昇し、そこに複合範疇 [<sub>AgrS</sub>AgrS+V] を形成することを前提としている。こうして新たに地位を占めたVはchain(V, t<sub>v</sub>)を作るが、こういう場合、chainも最小領域をもち、その範囲はchainの各成員の最小領域にある枝を合併した論理和であるとされる。今の場合chainの先端項であるVはAgrSと合体しているのであるから、chainの最小領域はもとのAgrSの照合領域を含み、従って当然Spec<sub>AgrS</sub>すなわち文主語の地位も含み込むわけである。図7参照：

図7 〔←印は「主辞－指定辞関係」或いは‘checking domain’を表す〕

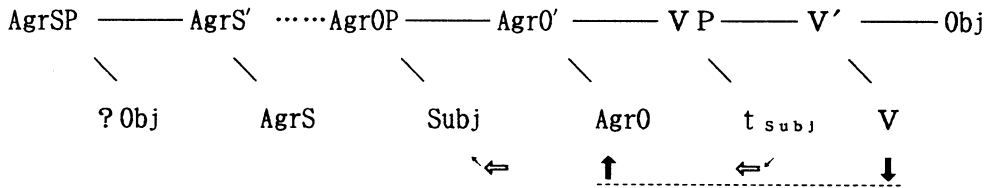


以上のような規定によってchain(V, t<sub>v</sub>)の最小領域は図でアンダーラインを付けた成分すなわちSpec<sub>AgrS</sub>およびSubj、Objをカバーすることになる。ところで、VがAgrSに編入されるための移動はコストがかからない、とされる。というより、言語習得(途上)者が現実に出会うものは、時制や一致活用をもった定形動詞(AgrS+V+T)の方であり、人はまずそちらの方を先に憶え、裸のVの方こそ抽象化された虚構であるから、むしろVの抽出のために精神的エネルギーを使いこそすれ、Vの定形動詞化にコスト不要なのは当然であろう。そうするといわばVが図のt<sub>v</sub>の位置とAgrSの位置に同時に臨在しているのと同じことになり、t<sub>v</sub>から見るとSubjもSpec<sub>AgrS</sub>も等距離、すなわち等しく照合領域にある、と見てよいことになる。こうしてSubjは無コストでSpec<sub>AgrS</sub>に昇進するという。

以上のような詭弁に知性の低い聴衆はつい騙されてしまうのであるが、実はこれは狡猾な循環論なのである。図7のVPはすべての成員が転出していることからわかるように、高度な抽象の産物なのであり、そもそもSubjと $t_v$ との位置関係は $Spec_{Agr,S}$ とAgrS+Vとの位置関係をモデルとして設定された雛形にすぎない。後者が言語事実であるとすれば、前者はそれを写したmap(地図)にすぎず、mapが先にあってそこから言語の実態が派生した、という論法は循環論的詭弁なのである。〔田原(1995b) 参照〕

さていよいよObjの交差移動——つまりVP内の目的語が $Spec_{Agr,O}$ に上昇する際に「VP内主語」の痕跡を横切る(或いは跨ぐ)理由の説明であるが、それにはまず図8のように「VP内主語」の方が $Spec_{Agr,O}$ に上昇したと仮定する。背理法による説明である。

図8



さらにVが(指定辞—主辞の移動の平行性を維持して)AgrO位置に編入すると仮定する。なぜなら、そもそもNPの移動は格照合のために行なうのであるが、対格の照合はAgrO+Vがその指定辞に対して行なうとされているので、図のSubjの格照合のためにはVの編入が不可欠だからである。この移動によって主辞のchain(V,  $t_v$ )が形成され、先ほど述べた最小領域の規約によってそのchainは{Subj,  $t_{subj}$ , Obj}を最小領域としてもつことになる。ところでチョムスキーは極めて反直観的な‘equidistance’の概念を提唱する。それは「 $\alpha$ と $\beta$ とが同じ最小領域の中にあるならば、それらは $\gamma$ から等距離(equidistant)であるとする」という形で定義されるが、これは理性で理解できる話ではなく、神秘的な靈感に訴える教義(dogma)にすぎない。まさに密教の面目躍如である。

ともかく、この教義によると、Objから見てSubjと $t_{subj}$ とは等距離にあるとされるので、Objは転入不可能な $t_{subj}$ の位置に代わって $Spec_{Agr,O}$ に転入してもよいのであるが、そこは既にSubjが占拠している。従ってObjが動くとなればさらに高位の指定辞位置、たとえば $Spec_T$ か $Spec_{Agr,S}$ へということになる。そして格照合のために主辞がそれに従って新しい主辞位置へ移ることになる。そこで主辞[V+AgrO]も図のAgrS位置に移る(?)と仮定されるが、その移動は新しいchainを作る。従って新しい最小領域を作ることになるが、図の $t_{subj}$ は当然その最小領域には含まれない〔新旧両主辞の指定辞にも補語にもなっていないからである〕。「こういうわけでObjは、 $Spec_{Agr,O}$ の位置に到達するため以外には $t_{subj}$ を跨ぐことができない」「従って、VP内主語を $Spec_{Agr,O}$ に上昇させると目的語への一切の格付与が阻止され、目的語は始発位置に凍結されてしまう」と彼は理論を展開するが、論理の飛躍があつて納得しがたい。この論証には次のような誤りがある。

まず文主語の形成に関する図7のシステムであるが、実はVは直接AgrSと結合してはな



らないのである。主格の照合者は [AgrS+V] ではなく [AgrS+T] とされているのであるから、VがまずTに上昇編入され、その複合体 [T+V] がさらにAgrSに上昇編入されて [AgrS+T+V] が形成され、それが自分の指定辞 (checking domain) に対して格照合を行なうのである。しかしこの [AgrS+T+V] の中のVは主格照合機能に関して余計者であって、事実、英語では助動詞が時制機能を引き受ければ本動詞がなくても主格主語は生じし得る。このことを考慮すると、VはせいぜいAgr0までしか上昇しない筈である。

次にいわゆる交差通路についてであるが、‘equidistance’の規定を逆手にとれば、SubjとObjは上部の成分から見て‘equidistant’なので、Subjが上昇する代わりにObjがその位置に上昇してもまったく平等にOKの筈である。その際、Objの主辞がVであることは一切関係がない。もともと主格照合にはVは関係しないからである。そしてObjがSpec<sub>T</sub>を経てSpec<sub>AgrS</sub>に転入すれば、当然 [AgrS+T] から主格／絶対格を照合される。

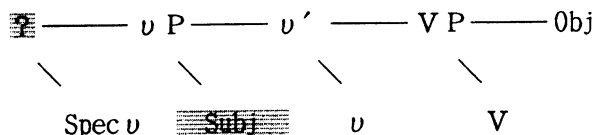
一方Subjの方は、Spec<sub>Agr0</sub>に転入して [Agr0+V] から対格を照合されるという筋書きになるが、さすがにそれには耐えられない。Agr0を対格照合子としないで「能格照合子」と見直し、AgrEと書き替え、[AgrE+V] がその指定辞に能格を照合すると理論デザインすれば、最終的にSubjが能格・Objが絶対格を認可された能格言語型の節文構造が構築されるわけである。その際Subjはもとの位置からSpec<sub>AgrE</sub>に転入するだけであるから、ObjがSpec<sub>T</sub> 或いはSpec<sub>AgrS</sub>に転入する通路と比較すると、前者の通路は後者の通路の中に納まり、いわゆる‘nested paths’を形成するので、悪名高い‘crossed paths’は生じない。

以上でわかるように、「VP内主語仮説」は実は能格言語の統語構築原理なのであり、これで英語のような対格言語の統語構築を説明しようとする、チョムスキー理論のように一種神がかり的な精神状態と詭弁が必要になるが、世俗的な説得力はまったくない。

## 2. 2 C & T理論の新たな虚構——軽動詞と主語挿入

さすがに自らの1993年体制では説得力不足と感じたのか、チョムスキーはミニ・プロの深化と再検討を目指して‘Categories and Transformations’ (Chomsky 1995, Ch.4) を発表した。その枠組では機能範疇Agr0とAgrSが廃止され、他動詞句の構造は図9のように「軽動詞」*v*というフィクションを導入したものとなった。[ibid. p.352 (182) 参照]

図9



「軽動詞」*v*というのは音形のない抽象動詞であり、Vは顕在的に*v*の位置に上昇して複合動詞 (Vb) = [<sub>i</sub> V <sub>i</sub>] を形成するという。そして、驚くべきことに、図でSubjは*v*の照合領域つまり指定辞ではなく、挿入された (inserted) ものだというのである。そうする

と、chain([<sub>v</sub> V <sub>v</sub>], t<sub>v</sub>)の照合領域はどうなるのかという疑問が起こるが、いきおい Subj を飛び越えて Spec <sub>v</sub> ということにならざるを得ない。望の資格はおそらく <sub>v</sub> P の繰り返しであろう。従って Obj は格照合のためにこの Spec <sub>v</sub> に転入することになる。従って、Obj はこの枠組でも Subj またはその痕跡を跨いで上昇することになるわけである。

このような理論デザインは、はっきり言って、1993年体制よりも悪化している。<sub>v</sub> という虚構は Agr0 に代わるものとして認めるにしても、Subj の挿入(insertion)という虚構は従来の付加(adjunction)とは別種の構築原理を導入することになり、文法の簡素化を目指すミニ・プロの理念と逆行するものである。このように、もがけばもがくほど理論デザインが(年々)悪化していくのは、やはりチョムスキーの齢のせいであろうか。盛者必衰は世のならい、21世紀のポスト・チョムスキーを模索すべき時期に來たようである。

### 3. まとめと補遺

40年間変形文法を追求していながら、John hit Bill. のような他動詞構文という基本的問題にすら未だ定説を確立し得ていないチョムスキー派の無能さは驚くべきことであるが、彼らの「<sub>v</sub> P / V P 内主語仮説」が変わらない限り、対格言語の簡潔な文法は永久に不可能であろう。句構造文法は対格言語／能格言語のいずれにせよ「ゼロ述語」とその指定辞たる主語候補のセットから構築を始め、有標的な格選択は V P の上に  $\theta$  役割述語(AGRx)を掛けることによって保証するのがよい。なお、この思想は S00Th の枠組と説明力を何ら損なうものでない。田原(1996, a)の「引率」の概念は、[<sub>v</sub> V [<sub>OP</sub> NP (=SPEC $\emptyset$ )  $\emptyset$ ]] の構造が [<sub>v</sub> V NP] に取って代わっても、V が NP に対して及ぼす有効な影響であることに変わりないからである。

### 参考文献

- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. The MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. The MIT Press.
- 山口 巖 (1995) 『類型学序説』。京都大学学術出版会
- 田原 薫 (1995, a) 「Xバー理論の徹底批判とその対案 V' 内主語図式の検討」。『言語文化学会論集』第5号 pp. 3~19。言語文化学会
- 田原 薫 (1995, b) 「指定辞と補語の地位づけに関する一提言：特に前置詞句と句動詞、受動構文に即した 'S00Th' の提案」。 *Kansai Linguistic Society* 15. pp. 79~89。関西言語学会
- 田原 薫 (1996, a) 「S00Th と『挟み統率』から開ける展望——ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に——」。『ニダバ』第25号 pp. 137~146。西日本言語学会
- 田原 薫 (1996, b) 「英語のコピュラ文、特に難易文の 'S00Th' 流統語分析」。『言語文化学会論集』第6号 pp. 1~10。言語文化学会